

クラス合唱の多様性

中野 未穂

要 約

本稿では、特別活動として学校行事で行われる合唱の取り組みから、①それぞれの目的をもつこと、②モチベーションに違いがある仲間との練習について、「歌うこと・歌う場の捉え方」「自分自身との向き合い」「他者との関わり」に対する子どもの向き合い方について述べる。例年はコンクール形式で行われているが、今年度はコンクールではなく録音作品として仕上げる形式で行われた。このことは、子どもたちにとって「歌うこと」「合唱すること」の本質を考える機会となった。行事としての合唱の取り組みのあり方、そこから子どもがどのような体験をし、そこから何を受け取っているかを見極めていくことを今後の課題とする。

キーワード 多様性 音楽科 特別活動 合唱 多様性 学校行事

I はじめに

1 子どもの実態

本校の子どもは全体的に運動会や合唱コンクールなど行事に対して意欲的である。学級で活動することに対しても、他者に協力的な子どもが比較的多く、協働的に取り組む環境には慣れている様子がある。しかし、協力して取り組むということは元々もっている素地によるものもあるが、人間関係によるものや経験の積み重ねによるものも大きい。どのような体験をし、そこから何を受け取っているのかが重要である。

今年度は、行事のあり方がこれまでと大きく異なり、共につくり上げていく方法や合唱との向き合い方を模索している場面が多く見られた。子どもたちには、やりたいこととできることのせめぎ合いの中で、今できることを最大限に探していく姿が多くあった。それは竹早での経験値によっても異なる基本的にはどの学年にも通じるものであった。1年生にとっては実質初めてのクラスで取り組む活動が合唱であり、2、3年生にとってこれまでに経験したイメージが大きい。特に3年生にとっては集大成として理想の姿があったはずである。この行事に対する

向き合い方はそれぞれの学年や個人で異なり、全ての子どもの満足感を得られたわけではなかったが、認められた環境を無駄にせず協力して取り組む姿がどの学年にも共通していた。

2 本実践（題材・教材・材等）について

題材名「歌うこと・合唱すること」

教材：「合唱曲」

1年生 「明日へ」（富岡博志 作詞・作曲）

「My Own Road-僕が創る明日-」

（桐野知子 作詞・作曲）

「翔る川よ」

（村田さちこ 作詞/瑞木薫 作曲）

「空高く」（山崎朋子 作詞・作曲）

2年生 「HEIWA の鐘」

（仲里幸広 作詞・作曲/白石哲也 編曲）

「いのちの歌」

（Miyabi 作詞/ 村松崇継 作曲/富澤裕 編曲）

「手紙～拝啓 十五の君へ～」

（アンジェラアキ 作詞・作曲/鷹羽弘晃 編曲）

「結」

（miwa 作詞・作曲/佐藤賢太郎 編曲）

3年生 「証」

（山村隆太 作詞/阪井一生 作曲/加藤昌則 編曲）

「ほらね、」

(いとうけいし 作詩/まつしたこう 作曲)

「僕のこと」

(大森元貴 作詞・作曲・編曲/黒田賢一 合唱編曲)

「青葉の歌」

(小森香子 作詞/熊谷賢一 作曲)

3 教科のねらい

ねらいは次の通りである。

- ・歌が得意で積極的な子どもにとってもそうでない子どもにとっても練習に参加しやすい環境をつくること
- ・クラスの仲間と納得のいく関わり方で練習を進めたり、合唱への取り組み方を見つけたりすること

例年は「優勝」という目的がはっきりしており、結果がどうあったとしても優勝に向けてクラス全体でつくり上げた体験に達成感を味わうことができた。その一方で、優勝を目指すことで合唱練習を強制されて義務感を感じたり、苦手な生徒がプレッシャーを感じたりするなど消極的な気持ちをもってしまう場面もあった。歌うこと自体は好きであっても、自分の歌唱力に自信がもてずクラスの仲間に迷惑をかけないようにと声を出すことに遠慮がちになってしまいう子どもいたかもしれない。コンクール形式でなくなった今年度は、「他クラスと競う」必要はない。そのようなあり方の中では、歌や合唱とのそれぞれの向き合い方や目的を尊重することができる。今年のあり方だからこそ、「人が歌うこと」「人と歌うこと」「学校行事の一端としての合唱」について改めて考えるきっかけとなった。

合唱との向き合い方や参加の仕方にそれぞれ違いがあることを知ることで、また、合唱との関わり方や合唱する目的について個人が尊重されることによって、歌が得意で積極的な子どもにとってもそうでない子どもにとっても練習に参加しやすく開放的に取り組める環境をつくることができると考える。クラスで合唱に取り組む中で、担当する役割や立場によって温度差が生じるのは当然である。それを乗り越えるために、あるいは乗り越え方を経験するため

に、それぞれが納得のいく関わり方になるようにお互いに折り合いをつけられる姿を期待したい。

II 多様性の教育の観点からみた実践の構想

1 本実践における多様性の意味

本実践で焦点を当てる多様性は次の通りである。

- ・目的の多様性
- ・価値観の多様性
- ・向き合い方の多様性
- ・自己理解・他者理解の多様性

例年のように、コンクール形式であるということに練習に取り組むための原動力であった側面もあるが、コンクール形式ではなくなったからこそ「優勝」にこだわる必要がなくなった。このことによって純粹に「合唱する」ということに向き合える時間になったと考える。様々なモチベーションの子どもがいることを理解しながら、それぞれが納得いく取り組み方を見つけることが本実践における多様性の意味である捉える。

【目的の多様性】

この目的とは、「歌う行為」についての目的とする。「歌う行為」の目的では、個人の技術を磨くことを目的としたり、仲間と声を合わせることを楽しんだり、声を出すことを通してストレス発散させるなど、目的はそれぞれにあると考える。なぜなら、仮に合唱曲を「表現する目的」とする場合には、統一感のある演奏のためには、同じ楽曲を表現する者同士の間で何を表現したいかある程度の方向性を共有する必要がある。一方「歌う行為」のみを目的とした場合には、コンクール形式でなく競う必要がないからこそ、歌う目的はそれぞれで、むしろ自分の目的を自覚して参加することによって、開放的に取り組んでいる姿が期待できると予想するからである。

【価値観の多様性】

「歌う行為」が好きか嫌い、自分にとって遠いことなのか近いことなのか、子どもの経験によって様々である。また、一人で歌うのか仲間と歌うのか歌う規模によっても位置付けは異なる。生活の場面に

よっても、歌うことを大切に考え優先順位の高い行為なのかそうでないのかということも様々である。それぞれの価値観を否定しないことで「歌う行為」を自ら選んで取り組むことにつながると考える。なぜなら、熱心な仲間の姿を見て義務感を感じることもあれば、仲間の熱心さや歌うことを大切にしている姿に触れて、協力したい気持ちが生まれ、「歌う行為」を自ら選択することにつながるからである。そのことを通して、「自分が歌う行為」「人と歌う行為」の価値について考えていくきっかけにしたい。

【向き合い方の多様性】

練習や歌うことや合唱との向き合い方とする。技術的なことを高めたり、表現を追求したりする、楽しんで練習に参加したり、仲間の迷惑にならない程度に消極的に取り組んだり（本当はさぼりたい気持ちが全面的であるかもしれないが）、練習に参加する姿は様々である。コンクールでない今年度は特にその姿には幅がある。子ども同士の関係性の中でどのように乗り越えていくか、あるいは向き合い方の差が練習を成立させることにどのような影響を与えているのか着目する。なぜなら、それぞれの参加の仕方や仲間の合唱との向かい方を知ることは、練習の質や密度、楽しみ方にも関わってくるからである。仲間の向き合い方を知ることを通して、合唱を完成させることだけでなく、練習空間を成立させることへの達成感につなげていきたい。

【自己理解・他者理解の多様性】

「歌うこと」「合唱すること」には、得意・不得意の差がある。音楽経験や歌唱の経験もそれぞれであり、単旋律をみんなで歌う斉唱については、校歌や応援歌、誕生日会などの場面でも気軽に経験することは多いが、合唱のような和声的な経験は音楽の授業や行事における一部の場面での経験することの方が多いため、日常的な感覚にないこともある。もともとの経験値や感覚が異なる者同士が練習を進め、表現を磨きといった合唱をつくり上げていくには、自分の感覚だけでは成立しない。「歌を歌う」「合唱をする」という空間をより良い体験にするには、自分を理解したり仲間を理解したりする必要がある。なぜなら、なぜ自分は練習に熱心になれるのか、

なぜ練習に消極的な人がいるのか、消極的な人の協力を得るためには何が必要か、自分ができることは何なのか…などとそれぞれの思いを大切にすることで、お互いに納得のいく形で練習を進めることができるからである。そのことは、お互いを尊重することにつながり、それぞれの合唱との距離感を大切にできる機会につながると考える。

2 本実践でめざす多様性に関する子どもの姿

本実践でめざす子どもの姿は次の通りである。

〈自分自身〉

- ・「歌うこと」や「合唱すること」が自分にとってどのようなことであるか体験や経験を踏まえて考えている。

- ・これまでの自分との変化を実感している。（自由に歌えるようになった、声を出すことに抵抗がなくなった、開放的に取り組めるようになった等）

〈人との関わり〉

- ・歌うことや表現を考えることについて相手の意見に関心を持ち議論を深めることができる。

- ・練習に取り組む時に、クラスの仲間のことを考えながら取り組める。

この姿について、練習の中での子どもの発言や行動や、「歌うこと」「合唱すること」と自分自身の関わりや他者への意識を見とっていくこととする。

3 多様性を理解するための場

子どもたちの多様性が引き出される場として、【コンクールという要素がなくなった状況】に着目する。

今年度は合唱コンクールという形式を取らず、発表形式ではなく各クラスで仕上げた合唱を録音し、録音作品として仕上げるという形でおこなった。

例年との違いとして、コンクールではないことと、生発表ではなく録音作品として仕上げるというところに特徴がある。（このような形式に至った議論は後に述べることとする。）その中で子ども達の意識は、コンクールという競い合いに拘らず良い合唱をつくりたいという前向きな気持ちの子どももいれば、コンクールでないならやる気が出ないという子どもや何も感じない子どもまで様々にいた。様々なモチベーションの子ども同士が共生する中での練習の進め方、何のために頑張るのかを見つけるため

に、自分自信を見つめて仲間の思いを受け止めながら取り組むことを手立てと考えた。

具体的には、以下の内容である。

- ①練習への取り組みや議論を有意義にするために、それぞれの目的を見つけさせる。(目的をもつ)
- ②音楽経験の違い、得意不得意の差、一生懸命になれる人もそうでない人も様々なモチベーションの仲間と一緒に空間を共有している認識をもたせる。(他者理解)
- ③自分の変化やどのような思いで取り組んでいるのか考える。(自己理解)

4 活動の流れ

●準備：7月～8月

【選曲作業】

- ・選曲委員を募り、候補曲として4～5曲に絞り込む。クラスの特徴(男女の声のバランス、パートの特性、雰囲気)や難易度を踏まえて選曲を行う。
- ・候補曲からクラスで1曲に決定する。※原則、他クラスと重ならない合唱曲に決める。

【指揮者・伴奏者決め】

- ・立候補あるいは推薦により決定する。
- ・決め方も含めてクラスで話し合う。(例：オーディション形式、スピーチ形式等)

●音楽の授業：9月～10月末

※1年生 全10回／2・3年生 全7回

第1次(1～2時) 譜読み・楽曲の全体像を捉える。

第2次(3～5時) 各パートの旋律を定着させる。

第3時(6～7時/6～10時)

- ・ハーモニーを意識して歌う。
- ・楽曲の表現を考え・深め・仕上げる。

●特別活動

- ・週に一度、学年ごとに1コマを練習時間に設定。
- ・練習場所をクラス別に割り当て、指揮者・伴奏者・パートリーダー・文化研究発表会委員(以降、文研委員)の生徒を中心に自分たちでパート練習・全体練習の内容を計画して行う。

〈休み時間〉

昼休みと終学活のそれぞれ15分をクラスごとに練習場所を割り当て、指揮者・文研委員を中心に練習を進める。

Ⅲ 実践の実際

先述の通り、今年度の合唱の実施方法は生発表ではなく「録音作品」として仕上げるのが例年と大きく異なる点である。そのことを踏まえて、選曲作業に入る前に、今年度はコンクール形式にするかしないかということを議論する必要があった。この議論は、文研委員や3年生をはじめ子どもたちの意見を無視して教員だけで決めるわけにはいかない。子どもたちの議論で出た意見として、「コンクールにしないとみんなが一生懸命に取り組めないのではないか」「コンクールだからこそ竹早の合唱の熱が伝わる」「録音された合唱では、環境が違ったりして、それを比べるのは公平ではない」「コンクールにしない方が気軽に楽しめる」というものであった。仲間のモチベーションを心配する意見、これまで優勝にこだわってきたから今年も優勝したいという気持ち、コンクールとして審査するには公平な条件が必要だと意見である。録音を審査する場合の評価基準をどのようにするかなど、審査の公平性とその審査結果に納得できるかを踏まえた結果、コンクール形式にはしないという結論に至った。

【選曲作業】

合唱の取り組みは、7月の選曲作業から始まる。

1年生は音楽科が提案する候補曲の一覧から選ぶか、2・3年生は自分たちで歌いたい合唱曲を候補曲にする。これまでの先輩が歌っていた曲を参考にしたり、YouTubeで検索した楽曲やNHK音楽コンクールの歴代の課題曲などを持ち寄ったりしている様子があった。

3年生では、自分たちが1年生の頃に3年生が歌った難易度の高い楽曲に感銘を受け、そのような大曲にいいよ取り組めるという期待を抱く様子があった。しかし、コロナ禍の影響により今年度は練習環境や回数が例年通りではなく、練習方法の見通しが立たないことから、「(場合によって納得のいく仕上がりにならない可能性もあるが)大曲に挑戦したこと自体に達成感を感じたいか」あるいは「この状況の中で無理なく仕上げ、表現を追求していくこ

とを目指すのか」という選択をしなければならなかった。コンクール形式でなくなったことが、選曲に大きな影響を与えている。例年、J-POP を合唱に編曲した楽曲のように合唱のために作られていない曲は優勝に選ばれにくく、音楽科としてもフレーズと歌詞のまとまりがリンクしている合唱のために作られた合唱曲の方を推奨している。そのため、コンクールでない今年度は候補曲や理由に幅が見られた。

「優勝を目指すわけでは無いから自分たちが本当に歌いたい曲を歌いたい」「3年生として後輩に伝える合唱として相応しい曲を選びたい」「今の自分の気持ちとして共感できるものを歌いたい」そのような発言が話し合いの中にあった。

2年生の話し合いでは、これまでの2年生の選曲を参考に、難易度について議論があった。様々なモチベーションの仲間がいるということを前提に話し合う必要がことを伝えたところ、「去年のように練習ができないことを考えると、難易度は下げて歌いやすい曲の方がいい」「難易度を下げると1年生の合唱との差がわからない」「難易度は無理なく、でも聴き映えのする曲はないか」という意見が出た。多くの意見を伝え合った上で1曲に決定することができた。また、伴奏者決めでは、コロナ禍で特別教室や楽器の使用の制限がありピアノを使用したオーディションをすることができなかった。しかし、立候補者は演奏技術で決めたいという思いがあったため、各自が自宅で演奏した動画をもちより、クラスでそれを視聴して決める様子があった。

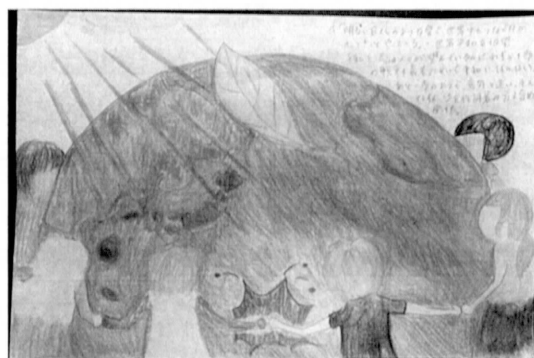
【練習の様子（授業・休み時間）】

練習の始まった9月は飛沫予防の観点から、音楽室での練習はできなかった。体育館を使用し、4ブロックに分かれ前後・左右の人との距離を1m以上空け、歌詞は用いずにハミングあるいは母音による歌唱を行った。マスクを着用していることと、体育館という空間や音響の状況から、子ども同士の声が聴こえにくい状態であった。いつもはよく声の出る仲間の歌声を聴きながら、その音に自分の声を重ねて音とりを行っている子どもも、周りの声が聴こえないため不安な様子が顕著に見られた。



〈仲間と自分の声を探りながら歌う様子〉

歌詞で歌唱することができない間は、曲から連想することをイメージ画で表すなど、それぞれが旋律や歌詞に対するイメージを膨らませ、学活の時間では曲の伝えたいことやテーマについて議論した。



〈合唱曲（「青葉の歌」）のイメージ画〉

目的をもって話し合うことを伝えたところ、あるクラスでは、「青葉の歌」の歌詞にも出てくる青葉の色についての意見交換することになった。「青々とした緑」「ゴールド」「グラデーション」などと個人でのイメージを伝え合いながら、強弱や音色などの音楽表現につなげ議論や練習が活発に進んだ。

また、あるクラスの話合いでは、「みんなにとっての“僕のこと”（このクラスの合唱曲）ってなんですか？」という指揮者からの問いに一人一人が発表し、曲に対する思いを伝え合う場面もあった。

歌詞を用いた練習が行えるようになったのは、日本合唱連盟の飛沫実証実験の速報が発表された10月の中旬からであった。歌詞を旋律に乗せて語るように歌うためには、何度も歌い、慣れるが必要である。どのクラスも残りの練習時間を「歌う」時間に費やしていた。ところが、あるパートでは音とりの

精度が不完全であったため、なかなか全体練習ができないクラスもあった。できないことが子どもたちの焦りとやる気にも影響し集中力が途切れた場面も見られたが、「切り替えてやろう」「やるしかない」という声があがり、なんとか最後まで音とりを完了することができた。

どのクラスも全体練習では指揮者の動きを意識し、速さや強弱、ブレスのタイミングなどを揃え、繰り返し練習を重ねた。

【録音】

今年度の本番は「録音」のため、2～3回通して歌い、その録音の中でより良いものを最終的に残す作品とした。例年経験している本番と異なり、聴衆のいない本番について、「緊張せずのびのび歌えた」

「誰もいないことが逆に緊張した」「あっさりと終わった」などの感想の声があった。3年生からは、

「これがこのクラスの集大成かと思うと不思議な感覚がある」「本当に終わったのかな?」「やり切った感じがする」という声と共に、最後の録音終了の直後に、張り詰めていた集中や緊張感から解放され、力が抜け安堵している姿や、やり切って涙を流している姿も見られた。

IV 考察

次に、合唱の取り組みを通して子どもたちの活動中の発言と「歌うこと」「合唱すること」に対しての記述内容を記す。①それぞれの目的をもつこと、②モチベーションに違いがある仲間との練習について、「歌うこと・歌う場の捉え方」「自分自身との向き合い」「他者との関わり」を視点に手立てが有効であったか考察する。

①それぞれの目的をもつこと

—歌うこと・歌う場の捉え方—

〈発言〉

- ・これまでは、声を出すことにただ気持ちよさを感じていたけど、表現を考えることや議論し合うことが楽しい場だった。

〈記述内容〉

- ・自由な行為。歌詞をどう受け止めるか、どう表現するか、声に込める感情・技法・声の色を全て歌手に委ねられる。
- ・誰かが歌っている歌を自分も一緒に体でリズムを感じて歌うのはとても楽しいこと。
- ・自分にじっくりくる歌詞の曲を歌うことで人に「自分とは」を伝えることができる。
- ・人に自分の思いや気持ちを気づいてもらうこと。
- ・面と向かって口に出すことができなくても、思いを伝えることができる大事なツール。(音楽で表すことが)遠回しでわかりにくいものだとしても、それに救われている自分を知ってほしい。
- ・心と歌声の成長の場。一年生では、歌そのものを楽しむ。二年生では、先輩の合唱に近づけるように努力する。三年生では、後輩たちに胸を張って見せられるような合唱をつくる。本気で打ち込める場として、竹早中の文化として伝える。
- ・哲学的な思考の人、感覚的な人など様々なタイプの人でも合唱を行える。声質や強弱などのテクニックより声を出すこと人間の気持ち、感覚を思いのままに表現することが合唱だ。
- ・一種の娯楽である。複数人で集まって歌ったりすることを自然に楽しんでいるから。今年は勝敗がない分、みんなが生き生きとしていた。
- ・目的は人それぞれ。娯楽やストレス発散、暇つぶし程度のものにすぎない。ですが、自分はそれだいたいと思う。なぜなら、歌うこと自体に意味をもってしまうと歌詞がスッと入ってこないからです。
- ・コロナ禍を考えると、いつも通りに実施できないし録音になることは想像できる。でもみんなの前で発表ができなくてつらかった。
- ・やはり生で聴く方が良い。体育館で生を聴くのと録音とでは迫力が桁違い。毎年三年生が下級生に伝え引き継ぐ場になっている。
- ・自分と向き合う・楽譜や友達と向き合う機会。仲間との協議にこそ、価値がある。仲間と支え合って、自分たちがどう変わったかを問われる大切な場。
- ・言葉でそのまま伝えるのが恥ずかしいが、音にの

せて伝えることで自分と相手の両方を楽しい気持ちにさせている。そんなコミュニケーションの一つ

- ・哲学的な思考の人、感覚的な人など様々なタイプの人でも合唱を行える。声質や強弱などのテクニックより声を出すこと人間の気持ち、感覚を思いのままに表現することが合唱だ。
- ・一種の娯楽である。複数人で集・たった一人では表現できない音の深さや思いが伝えられる。みんなが真剣に音に向き合っている。
- ・みんなで同じことに取り組むことが少ないので、大切な体験として恋しくなる。
- ・今まで努力してきたこと完成した歌を披露し、みんなに伝えお互いに確かめあう証のようなもの。
- ・何かを表現する、伝える上で決定的な縛りや型が存在しない。思いを残したり、歌を通してお互いに伝え合ったり、様々な楽しみ方もできる。

この記述からは、歌うことが、ストレス発散や暇つぶし…など身近な存在でありそれぞれに歌う目的を持っていることがわかる。また、個人的な楽しみから、相手に気持ちを伝えたり仲間と共有したりする体験であるという記述もある。歌う場のあり方については、コンクールではないから生き生き取り組めたという子どもいれば、無観客や録音ではなく伝える相手が目の前にいることを望む子どももいる。今年度ように「コンクールという要素がなくなった体験や経験」から、「歌うこと」「合唱すること」「発表すること」が自分にとってどのようなことであるか考えている姿が見とれる。コンクール形式でない状況からそれぞれの歌う目的をもつことは手立てとして有効であると考ええる。

—自分自身との向き合い—

〈発言〉

- ・意外と1年生の頃もしっかり声は出ていたけど、今年は歌詞の中身を自分に重ねることができた。

〈記述内容〉

- ・普段あまり歌うことが好きでない自分もクラスなど団体になって歌うことで人影に隠れながらも、全力で自分を表現することができた。

- ・初め、歌は好きなものの大きな声で歌う自信もなく自分が上手に歌えているもわからなかった。しかし、最近家では大声でバンバン歌えるし、自分の声を聞いてもよく伸びて響くようになったと感じる。
- ・去年の自分、今までの自分との戦いだと思う。今年はクラスごとの戦いというものになくなったのでより一層自分との戦いが活発になった。(リーダーとしての自覚や自分の声・音域についても)
- ・世の中には、歌うのが得意な人・不得意な人がいるし、それが理由で歌いたくない人もいる。しかし、人は皆生まれた時は、周りの音を、環境を全身で感じ取っている。だから、ほとんどの人にとって歌、音楽は潜在的に親しみのあるものだと思う。
- ・本当の自分をさらけ出せる。歌うことで自分がどんな気持ちなのかなどがわかる。
- ・特別なもの。人生で一度のメンバーで歌うから。
- ・一種の自己表現。中学生や思春期の人だけでなく、多く的人是は人前で自分をさらけ出すというのは難しい。合唱なら一緒に歌う仲間の声が自分を励ましてくれて、もとは歌うのが好きなのに一人では恥ずかしく歌えない人もめいっぱい歌えるようになる。

この記述からは、過去の自分と今の自分を比較し、成長を感じる姿や、歌う経験を重ねて、歌うことに対しての自分なりの思いを見つけていることもわかる。「変化やどのような思いで取り組んでいるか考える」手立てを通して自己理解が深まり、「歌う行為」「音楽表現」「発表の場」に対する様々な目的を見出している。

②モチベーションに違いがある仲間との練習
—他者との関わり—

〈発言〉

- ・声を出すのは苦手だが、周りの友達が一生懸命な姿を見るとやってもいいかなって気持ちにはなる。
- ・クラスで一人一人にとって「僕のこと」について話し合うことができてよかった。

〈記述内容〉

- ・例年のように競い合いが行われないこともあり何をモチベーションにすれば良いのかわからなかったが、3年間の集大成として頑張ろうと思った。そ

う思わせてくれたのはクラスの仲間がいたから。

・自分から生まれるものもあれば他人からの影響で歌うこともある。人から人へ繋がっていきそれが大きくなっていく。

・歌詞解釈や練習ではぶつかり合うことも多くあり、嫌な思いをしながらもより良い歌を届けようと努力する。そうすることで絆が生まれ、その経験は大きく成長できる機会だと思う。

「実践の実際」でも述べたが、音取りの精度が不完全で練習が進まないクラスでは、「できない状況」が子どもたちの焦りとやる気に影響し、集中力が途切れてしまった。仲間の異変に気がついた子どもから、気持ちを切り替えて再度集中しなおすよう促していた。仲間を促す動きから、仲間の变化に気づき、他者の意欲や気分の変容を認識していることがわかる。また、発言や記述から仲間が一生懸命取り組んでいる姿に触れ、意識が変わっている様子がわかる。その一方で、「実践の実際」で述べた「僕のこと」の話し合いでは、仲間と曲に対する思いを共有することができたが、相手の意見に関心を持ち議論を深めることが音楽表現にどのような変化があったかを見とることはできなかった。このことから、「様々なモチベーションの仲間と一緒に空間を共有している認識」し、クラスの仲間のことを考えながら取り組むことには有効だが、音楽表現に対しての有効性を認めることはできなかった。

V 成果と課題

子どもたちの記述からも、これまでの経験から「歌う行為」や「合唱すること」が自分にとってどのようなものであるか考えることができていた。また、今までの自分との変化や成長を実感している姿も見とることができた。人との関わりについては、話し合いでは相手の意見に関心をもったり、練習に取り組む時にはクラスの仲間のことを考えたりしながら取り組む姿が見られた。

このことから、手立てである①それぞれの目的を見つけさせる、②音楽経験の違い、得意不得意の差、

一生懸命になれる人もそうでない人も様々なモチベーションの仲間と一緒に空間を共有している認識をもたせる、③自分の変化やどのような思いで取り組んでいるのか考えるは、概ね有効であったと考える。しかし、これらの手立てが、音楽表現に対しては有効であるとは言えないため検証する必要がある。

また、今年度の「コンクール形式や生発表形式でない、無観客の録音」という経験は、特別活動として行う合唱の取り組みが、行事という側面だけでなく「歌う行為」について考え、掘り下げる体験になったと言える。

宮入(2015)は、「文化的行事としておこなわれる合唱コンクールは、クラス対抗といった競争性を含みながら、音楽という教科での日頃の成果が発揮されることになる。もっとも、学校行事としてのコンクールには、単に競い合うというだけではなく・帰属意識や達成感を高めるための教育的な配慮も付与されている。」と述べている。

コンクールを通して、行事の中で日々の学習の成果を発表する場面、クラスの仲間と目標や達成感を共有できることはもっともである。一方で今年度のように「コンクールにしない」ことが、子どもたちにとって「歌う行為」や「合唱すること」が自分にとってどのようなものであるか考える機会にもなった。そのことを踏まえて、本校での合唱の取り組みについて、コンクール形式にしないということも選択肢の一つとし、これからの「行事としての合唱」のあり方から、子どもがどのような体験をし、そこから何を受け取っているかを見極めていくことを今後の課題とする。

引用・参考文献

- 1) 宮入恭平：発表会文化論，青弓社：東京，pp. 107, 136-154, 2015.
- 2) 諏訪淳一郎：パフォーマンスの音楽人類学，勁草書房：東京，2012.
- 3) 日本合唱連盟：
<https://www.jcanet.or.jp/news/covidtest1008s.pdf>